

海上での救急医療行為

海上で船員が怪我や病気になった時、困るのは医療行為である。薬を飲ませるのは良いとして、注射しなければならぬ時もある。出航する時は、どんな病気にも対処できる薬や注射液、栄養剤、消毒剤は、十分な位に船主から渡される。

それを管理し、医療行為を船長の命を受けて、私が行っていた。近海で操業中に病人が出れば、中止し直ちに港に帰る。

緊急な事態でどう対処していいのか、分からない時は無線で、医師の指示を受ける。

私が船員時代、大きな病気や怪我は無かったが、風邪や腹痛、小さな怪我等は、毎日のようにあった。

風邪気味だから薬呉れ、腹痛いから何かよい薬が無いか、手を切ったから、包帯して呉れ等、私は看護婦さん並だ。無線室には医薬品が保管してある。誰しも無断で持ち出してはならない。

船団を組んで赤道付近の操業の際は、母船に医師が乗り込んでいる。総て医師の指示を無線電話で仰ぐ。手に負えない時は母船に横付け、乗り移り診察を受け、必要あれば入院する。母船には一人ずつだが、医師と看護師さんが居る。手術室も完備していた。あの当時ペニシリンと言う薬が開発され、内地を出航する時多めに積み込んだ。このごろのペニシリンは効かなくなったそうだが、あの当時はよく効いた。

ペニシリンが入った注射器と針がセットされ、完全に消毒されたケースに一本ずつ入っている。

内地を出航して二・三日後、若い船員の中には、港の紅灯の巷で遊び、いやらしい病気に罹って、発病する者が居る。

「局長注射して呉れや」と泣き付いてくる、港に引き返す事は

出来ない。皆が見ている前で裸にして、長椅子の上につつ伏せにし、お尻のプクプクした辺りをアルコールで消毒、有無を言わせず、反動つけて思い切りプツリとやる、戒めの為だ。三日間で三本注射すると、全快する、本当によく効いた。

五十年以上前の、笑えないフィクションである。ペニシリンは他にもいろいろな病気によく効いた。

他にミノファアゲンこと云った注射薬があった。船員の中には蕁麻疹をおこす者がいる、体全体や一部に発疹する。この薬は静脈注射で行う。看護婦さんがやっているのを見ると簡単なようだが、最初はなかなかうまくいかなかった。

長い航海だと野菜が不足がちだ、ビタミン剤や栄養剤を多めに持っていく。

通信士は「局長」と呼ばれ何でもする貴重な存在だった。手が空いたときは漁師、食事の手伝い、医者 of 真似事、船舶位置測定 of 天測もやった。万屋である。

六年間の短い期間だったが、人生航海の指針、人生行路の船出、尊い期間だった。

